

月例探鳥会から読み取れること・・・探鳥会データの解析をはじめました

今年の5月2日夜、NHKスペシャルとして『明治神宮 不思議の森～100年の実験』が放送されました。そこでは1920年代の造成当時の写真や計画書にそっての植樹、そして遷移にまかせての長大な管理計画などが紹介され、そこに息づく動植物が映し出されていました。鳥については、日本野鳥の会東京(当会)が毎月開催している明治神宮探鳥会の記録がベースとなった話や生態系の頂点としてオオタカが登場していました。そして、本多静六博士らが構想したこの地における極相林“永遠に続く照葉樹の森”が100年を満たすまで完成したことを伝えていました。

この放送のもとになったものは、2011～2013年にかけて神宮によって行われた「第二次明治神宮境内総合調査」で、鳥類調査には日本鳥類保護連盟と都市鳥研究会がかかわり、当会の探鳥会記録が資料として提供されました。報告書は510ページにおよぶ大書として、2013年に発行されましたが、そのなかで多くのページを割いているのが、1954(昭和29)年から2012(平成25)年までの当会探鳥会における出現鳥類の経年状況で、1種ごとに表として載せられています。〔次ページ表1・2〕

この2つの表からは、NHKスペシャルがメインとしていた明治神宮の森の変化を別の角度から見ることができます。多くの方は、かつて苑内で灌木の鳥・ホオジロが繁殖していたといっても信じられないと思いますが、この表1は、1970年代まではホオジロ〔写真1〕が営巣できる環境があったことを示しています。また表2は、森の鷹・オオタカが1980年代に冬鳥として棲みつき、2000年代になると留鳥となったようすを知ることができます。放送では2014年の繁殖のようすが映し出されていましたが、かつては東京都心部でオオタカが子育てするとは、だれも予想していませんでした〔写真2〕。

当会では10か所〔葛西臨海公園・清澄庭園・三番瀬・新浜・高尾山・多摩川・多磨霊園・東京港



写真1 囀るホオジロ ©H.Kawachi



写真2 2012年に明治神宮で巣立ったオオタカの幼鳥 ©H.Kawachi

野鳥公園・明治神宮・谷津干潟)で月例探鳥会を実施していますが、今回1994年～2015年までの20年間のデータが電子化されました。研究部では、これらのデータから何が読み取れるのか解析することになりました。

まず第1段階として、東京に位置する7か所を対象とする予定です。この7か所は東京湾岸・都心の緑地・郊外の墓地・河川・山地と環境が違いますので、そこからどんなことがわかるか・おもしろい話が浮かび上がってくるか、いまのところわかりません。

その結果は、随時このページで発表していく予定です。ご期待ください。